

アナイス・ニンの日記について

木村 淳子

(一)

アナイス・ニンの名は、これまで、多くヘンリ・ミラーを通して世に知られていた。最近になって、彼女の作品そのものによってアナイス・ニンが再認識され、特に彼女が同時代のヨーロッパ、アメリカのシュトルレアリスト達に与えた影響が見直されてきている。ヘンリ・ミラーは、この美しい女流作家についてその著作の中でしばしば語っており、『宇宙的な眼』の中では、「星に憑かれた人」として一章をさいている。

「私がこの数行を書いているときに、アナイス・ニンは五十冊目の日記を書き始めた。それは自己確認を目ざした二十年にわたる苦闘の記録である。まだ若い女性ではあるが、きわめて活発な生活の中にあって、かたわら記念碑的な告白を書いたが、世に出たときには聖オウガステイン、ペトロニウス、アベラール、ルソー、プルースト等の黙示と肩を並べることだろう。」

ヘンリー・ミラーがこのように述べているニンの日記は、その量の尠大であること、その中に記述されている数々のエピソード、特にアナイスをめぐる多くの人々にまつわるエピソードが、憶測や推測の種となって世人の興味を喚起していたのであったが、実際には一般の読者の目には長い間ふれることがなかった。日記はもともとフランス語で書かれたのであり、内容的には極めてパーソナルな部分もあつたりして、出版されるまでにはかなりの日時と苦勞を要したようである。現在英訳されているのは一九三一年から三四年までの第一巻と、三四年から三九年までの第二巻、三九年から四四年までの第三巻である。相当に手が加えられたとは云つても、「日記は航海にあふれている。生そのもののように航海のほかは何もないのかも知れない。」とヘンリー・ミラーが云うように、そこには一人の女性の生そのものの記録と真実の生に至ろうとする、ひたむきな苦闘の記述がある。読者ははげしい自己追求への努力に目くするめく思いがする。

日記は、アナイスがいろいろな場所で述べているように、家族を捨てて去ってしまった父の関心を取りもどし、父とのコミュニケーションの回路を保とうとする欲求のうちに生まれた。

「私は日記を、十一才の時に、私たちをアメリカに運んで行く船の上で書きはじめたのだった。父のために、父に、遠く離れてさすらうて行く私の身の上を語るために。」(アナイス・ニンの日記 第一巻(以下日記と略))

生まれて育ったパリを去ってアメリカに渡ることに、それはどのような意味においても、幼い子供がごくあたりまえに体験する、未知の国への出発というような、生やさしい体験ではなかった。それは彼女の存在のすべてを根底から覆えしてしまう大事件であった。それまで彼女を養ってきたヨーロッパの土壌から根こそぎにされて、全く異質の風土の中にあるニューヨークの土に移された時に、日記は自己の存在のための細々とした根を張るのに必要欠くべからざるものなのであった。日記は鉄と石とレンガの隙間に、わずかばかり見出された黒い土であった。学校はつまらなかつた。英語の勉強は無味乾燥であった。フランス語で日記を書きつづけることは、英語を全く理解しない父のためであつたと同時に、アナイス自身が、魂の息づきの場所として必要なのであつた。

「日記は、父のためにすべてを記録しておこうと、旅日記として書きはじめられた。父のために書きはじめられたものだから、私はそれを父に送るつもりであつた。父が、見知らぬ国を旅する私たちの跡をたどり、私たちの消息を知ることができるようにと書かれた手紙なのだった。日記はまた、見知らぬ異国にある私に、隠れた家を与えてくれる小島でもあつた。フランス語で書き、私の思想にふけり、私の魂を、私自身を、しっかりと見つめることのできる隠れ家のある小島だった。」(日記一)

「私は日記を父の許に送ろうとした。母は途中で紛失するかもしれない、と云って送らせなかつた。私は、ミサにあずかつて聖体を拝領する時、私の心の中の小部屋を訪れるのは、キリストではなくて、父なのだ、と想像した。無味乾燥な友達とのつき合いや、母が一生懸命に働いてどうにかやって行ける、アメリカでの人目に立たぬ生活と

くらべてみた時に、私は、自分が失なったものは父だけではなくて、生活の方法を、音楽を、音楽家達との交わりを、華やかな訪問客達を、特権を、ヨーロッパ風の生活を失ってしまったのだ、と知った。」(日記一)

父との別離、ヨーロッパからアメリカへの移住がアナイスに及ぼした影響は極めて大きい。先にあげた以外にも、日記の中には、このことについての言及が数多いし、小説作品の中でも彼女は、父と娘の異常なまでの愛情関係を描き出し、一種独得の世界を創り出しているのである。もしも彼女の生活が、父と共に過したヨーロッパの日々のあの光輝にみちていたら、その後の彼女はどのようなふうだったろう。その歩んだ道が、その世界が、どのように展開したであろうかを考え、想像してみるのは興味深いことである。

ここでアナイス・ニンの父と母について少しばかり述べておくほうがよいように思う。父ニンは、スペインでは旧い家柄の出の音楽家であった。父の世界は華やかさに満ちていた。コクトーやカザルスといった、当代の音楽の巨匠たちとの交友、美しい女性ファン達に取りかこまれた明け暮れは、ラテン世界の明るさを身につけている父の存在を、いやが上にも輝しいものにした。母ローズは在ハバナのデンマーク領事の娘であった。二人はハバナで知り合い、家中の反対を押切ってパリで結婚した。アナイスをかしらに二人の男の子が生れたが、この結婚は、その情熱的なスタートにもかかわらず、悲劇に終わった。母は、父が去ってしまったあと、三人の幼ない子供達を連れて、娘時代に暮らしたところのあるニューヨークに移ったのである。一つには、女が子供を育てながら生計を立てて行くのには、ニューヨークはヨーロッパよりも適当な場所であったし、ローズの姉妹の住むキューバにも近かった。もう一つには、これ

はアイナスが推測するところであるが、父の全く知らない世界に移り住むことで、子供達への父の影響を絶とうとし、また、そうすることによって、父への復讐を果そうとしたのかも知れなかった。

母の留守を幼い弟達の世話をしながらもったアイナスは、弟達のために物語を作り、作った物語のために小さな雑誌を作った。そして、次第に彼女は自分の内部に自分自身の世界を創り出して行った。

「九才の時に大きな不幸が私にもたらされた。(父と、ヨーロッパの輝しい生活を失なったことである。)私は永遠にこの明るい、優雅な生活からそらされてしまった。美しさや魅力的であることは第二義的なものになり、表面的なものは消えてしまった。私は代りのものを見つけないならなかった。父が去ってしまったのは、彼が私を愛さなかったからだろう。彼が私を愛さなかったのは、私が彼の愛の対象にふさわしくなかったからだろう。私は自分を父の興味をそるような人間にしようと思った。興味を持たれる人間にならなければ、と思った。私は心の奥底の悲しみと、自分に対する疑念のうちで成長していった。すでに九才の時に、男を魅力によって惹きつけておくことに失敗していたのだ。だから、私は彼の興味を惹くためには別の方法を試みなければならなかった。」(日記一)

こうして、アナイスのうちに父への思慕の念が次第次第に大きく強くなっていった、彼女は自分の内なる世界の中で、己れのあるべき姿、父と娘のあるべき関係を創り出していった。すでに十三才の時に彼女は、その後の作品を暗

示するような、盲目の音楽家の父と娘の物語を書いている。娘は盲目の父のために、身のまわりに起こるすべてを話して聞かせる。実際には見るかげもなく荒れたあばら家に住みながら、娘が父に話して聞かせる家の様子は、数々の美しいものにかこまれた、すばらしいヴィラのそれなのである。やがて父の目が治って、見えるようになった時に彼が目にしたのはみすぼらしいあばら家なのであるのだが、父は娘の夢物語に感謝する。なぜなら、娘の話しに出てきた家は、彼等の家のあるべき姿なのであり、真実なのである。現実がどのようなであろうと、それを超えたむこうに、真実があるにちがいない、とアナイスは考える。こうしたアナイスの基本的な態度が、後年かたちを変えてシュールリアリズムの世界に共鳴するところを見出すのは容易なことであろう。

「やがて日記はいろいろなものになった。自分の心を打ち明ける友、即興的に書きつけることのできる場所、人間を描写したり、物語を書くためにノートを取っておく場所、になった。ニューヨークのとある裏庭で庭作りに精出す人のように、私は花が育って行くのを見たかった。花の成長して行く神秘を、その根を見つめるために、私は土を取り除いてしまいたいと思った。意義、と云ってもよいだろう。私は最後に表面に出て来たものを見るだけでは満足できなかった。」（『未来の小説』一四四頁）

どこへ行くにも、アナイスは日記を携えて行った。ニューヨークでモデルとして働いていた時には、一日十五時間の仕事の合い間に日記にむかった。（そのために彼女は昼食の時間を犠牲にした。）人々がポケットからタバコを取り

出して喫むように、アナイスは日記を取り出した。日記は、彼女にとって阿片であり、パンシユであった。日記はアナイスの分身となり、生そのものとなった。「個性を持った人間を映すためには適当な鏡が必要である。自分自身を広い音域を持った感受性のするどい楽器にするために、私はこの鏡を作り出さなければならなかった。」と、彼女は後年になって、『未来の小説』の中で述べている。しかし、日記を書きつづける過程の中で、アイナスに次のように叫ばせた時期があったことも事実である。一九三三年の日記の冒頭には、次のような箇所がある。

「愛する日記よ、お前は私が芸術家になることを妨げた。けれど同時にお前は私に人間として生きつづけることを可能にしてくれた。私は友達がほしかったのでお前を創り出した。この友達に話すことで、たぶん私は人生をむだ使いしてまったことかもしれない。」(日記一)

精神分析家のオットー・ランク博士やヘンリ・ミラーは、彼女に日記をつけるかわりに小説を書くようにすすめた。彼等は、日記をつけることによって、彼女の創作のエネルギーが涸れてしまうのではないか、時間と労力が、パーソナルで人目につかぬものの中に浪費されてしまうのではないか、とおそれた。もちろん彼等とて、日記のすばらしさを讃嘆し、それを読むことに限りないのしみを見出したのであったが。かえって日記がすばらしかったからこそ、彼等は後世にまで人々に読まれる小説を書くことをすすめたのであろう。

「ヘンリはこう云った。

『たとえばきみの日記、あれこそ本当に豊かだ。おそろしいほど豊かだ。きみは、ぼくの人生が豊かだと云うが、それはただできごとや、事実や、経験や人間で一ぱいだけなのだ。本当に豊かなのは、ほんのわずかな素材によつてきみが書きだしている、あの長いページなのだ。』(日記一)

小説家としてのアナイスと対立した時期もあった日記は、航海も終りに近づいたいま、極めて親しい関係を結んでいる。日記は小説家としてのアナイスと決して対立するものではない。アナイスは自信をもっている。

「日記は作家にとって貴重なものである。私はそれを確信する。否定的な面があるとすれば、それは範囲の問題にすぎない。もしもその範囲が限られていて、狭くて、些細であれば、価値のないものとなるだろう。もしも、深く広範囲に成長すれば、それは作家にとって欠くことのできぬものとなる。」(『未来の小説』)

生涯を日記と共に暮し、成長し、生きた、アナイス・ニンの自負がここにある。

(二)

アナイス・ニンの日記をはじめて読んだ時に感じたのは、溢れんばかりの女らしさであった。対象に対する時の織

細な感受性、細やかな心ずかい、それから、エゴイスティックにさえ見える強い自己主張、ナルシシズム、今まさに獲物にとびかかろうとする猛禽のようななどんな目差し、それ等すべてを包含しての女らしさなのであった。個性の強さや自我のはげしさに僻易しながらも、そこに見出すのは、あらゆる個性を超越した女なのであった。アナイスという一つの強烈な個性に徹した時に、どのような女にも当てはまり、どのような女をも超えてしまった女なのであった。ヘンリ・ミラーの言葉を借りれば、

「純粹に個人的なものであつて、ナルシシズムふうなものは普遍性の中に吸収されてしまう。外見果しのない告白は、生そのものが芸術であると云う認識を通して、人間的な行動の流れの中に人間を復活させる。」（『宇宙的な眼』ということである。）

「男は女の知っているようなさびしさを決して知ることがない。男は力を得るためにのみ女の内部にやすむのだ。男はこの融合から養分を得ると世の中に出かけて行く。仕事や戦いや、芸術の世界に出かけて行く。男はさびしさを感じることはない。彼は忙しいのだ。胎内で遊泳していた時の記憶が彼にエネルギーと完成への力を与える。女も忙しいかもしれない。しかし女は空虚さを感じるのだ。肉のよろこびは女にとっては、かつてその中に己れを遊泳させたあのよろこびの波ではないし、他との触れ合いによって惹起される身うちを走るよろこびの閃光でもない。男がその内部にやすんでいるとき彼女はみたされている。愛の業の一つ一つは彼をその内部に引き入れようとする努力なのであり、誕生と再生の働きのなのであり、子供を、人間を産みだす行為なのである。男は胎内にやすら

って、行動し存在しようと欲求する度ごとに新しく生れ変わる。しかし女にとってクライマックスは誕生にあるのではなくて、男がその内部に休らう瞬間にあるのだ。」(日記一)

アナイスの女らしさの根源は、まさにこれ等の言葉にあきらかであるように思われる。それはアナイス自身のものであると同時に、すべての女性に共通の女らしさの源を明らかにする言葉でもあろう。父親のいない家庭の欠陥を埋めようとする努力にはじまった日記は、その後のアナイスの女性としての成長と発展の過程において、自身の内面世界の充足と完成への努力へと変化していった。当然のことながら、彼女の生そのものは、この努力のうちにあったのである。もしもこの努力を怠ったとしたら、彼女も述べている通り、それはアナイスの生、アナイスの存在そのものの崩壊を意味するのであった。男性にとっては常に自己の外部への発展であり、発進であり、それ故に動いて止まるところを知らぬ自己完成への努力は、女性においては人に知られることのない内面世界の充足、充実への努力を意味するものである。(とは云うものの、女性はい己の内なる世界を完全に外界から切りはなし、隠しておこうと、最大の努力をしているわけではない。反対に思わせぶりに、ちらり、ちらりと示したがかりさえるのである。)言葉をかえるなら、男性にあっては、自己完成は、場合によって程度の差こそあれ、常に己れの外部に目をむけて努力されるのであるが、女性の場合にはより多く自己自身に目をむけた姿勢を取るのである。こうした根本的な姿勢のちがいが、往々にして女性のエゴイズムとか、どん欲さと取りちがえられることがある。そしてまた、ここから女性にとっての真実は、男性にとってのそれと異なってくる。

「私はいつも人生に対して真実である、女性がそうであるように。けれどもヘンリヤフランケル、それからフレッド・ペルレは作り出し、虚構する。」(日記二)

己れに対して、また人生に対して真実であろうとするアナイスは外界の事物の一つ一つをたん念に漁る。訪れて来る人々の一人一人から自己の完成に必要なものと思われるものを取り入れる。対象物に向った時の彼女の反応は、触手にふれるものをからだ全体ですっぽりと包みこみ、消化してしまうヒドラのように、敏速である。自分の内なる部屋の空間をみだし、飾るのに必要なものを念入りに拾捨選択する。そして外界のなまの現実から、彼女だけの、彼女自身のための抽象の世界を創り出してしまふのだ。ちょうど、様々の種類と色合いの貝殻を取り合せてできあがるのが、思いがけない美しさを持った、巧みを凝らした細工物となるのと同じことである。見る人には、もとの貝のすがたを思いつくことなど決してできないのである。この作業の過程におけるアナイスは、全くすべての束縛から解放されている。己れの仕事に悦に入り、うっとり眺めている職人のようであり、陶酔の境にある人間のようにであり、水面に己れの顔を映してみとれているナルシサスの姿でもある。女性にとっては、すべて己れに真実であるものは真実なのである。たとえそれが傍目にはどのようなフィクシャスにうつろうとも。

「様々の理由から私はこの家を選んだ。」

まるで木のように地面から生えているかのように見えるからであり、古い庭の中に深くはめこまれていたように感じた。地下室はなくて、部屋は地面の上にじかに建てられていた。私は敷物の下に大地を感じた。ここで私は根を生やし、家や庭と一つになれるように感じた。植物のようにそれ等から養分を摂ることができるよう感じた。

まずはじめにしたことは、水槽や噴水の泥をさらって、もとどおりにすることだった。すると、私にはまるで家が生き返ったように思われた。噴水は陽気で楽しげだった。

私は恋人の来るのを待ちかねている人のような気持になった。天蓋が払げられ、儀式のために敷物が延べられる時のような、名誉ある客人の訪問を私が最初に受け、その方の住まわれるすばらしい世界を作りださねばならぬような気持になった。(日記一)

これは、アナイスがルーヴンヌに買って住むようになった田舎家の描写である。期待と予感にみちて、彼女はこの家の手入れをはじめたのであったが、その期待どおりに、ここにはヘンリ・ミラーやアントナン・アルトーはじめシュールレアリスト達、それに幼い頃に別れた父などが訪れて、アナイスの世界を彩ることになる。そして、この家の窓から見渡される風景はアナイスの思いのままにカットされて、彼女の後の作品の中にはめこまれることになる。いみじくも『コラーージュ』と題された作品があるのであるが、彼女の仕事はいつも、なまの材料を切り貼りしてコラーージュすることなのだ。その時、自分自身さえもが素材となり得る。己れの内なる空間をみたとすにふさわしいものと

なるために、アナイスは身づくろい、装う。ある冬の日、アナイスは、コートに毛皮をトリミングしてまるでロシアの王女のようなのである。ある時はスパニッシュダンスの舞踊手のようにきらびやかな色彩の衣服を着る。化粧をすることも、爪にエメナルを塗ることも、アナイスにとってはその生の根源にかかわる重大事なのである。己れに忠実であり、真の自己を求めようとする時に、これは逆説的に思われるかも知れない。けれど次のような一節を日記の中に読む時、読者はアナイス・ニンの女らしさをあらためて感じるようになるのではないだろうか。

「ヴィラ・スーラの方にむかって、赤いロシア風のドレスを着て歩いて行く時、私は再び世界と恋をしているような気持になる。全世界と恋をしているように感じる。」(日記二)

己れの内なる空間をみたそうとする努力が女らしさに通じる一つの道なのであるが、もう一つ女性の特徴を示すものに、己れの創りあげた内なる世界を誰かにのぞかれない、というのぞみがある。ランク博士はアナイスに、精神分析を受けにやってくる女性患者について次のように語っている。即ち、女性は他人の目を欺くことが非常に下手である。それで彼の分析した多くの女性患者は、こみ入った問題、例えば恋愛事件や、政治的な問題にまき込まれた時に、必ず手がかとなるものを残してしまふ。女性は、見つけられ、支配されたいのであると。ある程度の自己顕示欲は、男女を問わず、人間には誰しもあるものではあるが、男と女とではその質にちがいのあることは当然である。女性の場合には、極めてナルシズム風な陶酔感を伴った自己顕示慾となって表われてくる。自己をうつす鏡である日記

は、しばしば、この自己顕示慾のはけ口となりかねないものである。ニンの日記の中では、第一巻にこの傾向が比較的多くあるいは強く、見受けられるのであるが、それは彼女の若さ、つまり精神的な広がりや度合の弱さを示していることになるのであろう。第二巻を読み進んで行くうちに、読者は、彼女の内面世界がより大きくなり、強くなり、包容力に於いてまさって来るのを知るのである。女性に特有の己れの世界をのぞかれないという希み、打ち明けたいという希みは、云わば、女性の精神的な持続力や包含力の弱さの度合のバロメーターとも云えるものではないのだろうか。アナイスは、彼女の日記は、もともと去ってしまった父を引きとめておこうとする努力から生まれたものであるから、それが読者の目を意識しているように見えたとしても不思議ではない、むしろ当然であると云っている。自分自身の秘密の部屋を創り出すそうとする希み、そして創り出した部屋を誰かにのぞかれないとねがう一見矛盾した気持のいずれもが、おなじ源をもち、おなじナルシズムと云う流れに合して行き、それ故に、日記と云う形式が、女性に好まれるものであろうことは、納得の行くところである。

(三)

アナイス・ニンの日記の中には多くの人物が登場して来る。アナイスは、これ等の人物に対する己れの気持、心理の流れとでも云えるものを実に細かに記録している。例えば、ヘンリ・ミラーの妻、ジューンに対する彼女の憧憬の念には、同性愛的にさえ見えるものがある。ジューンと並んでパリの街路を歩きながら、彼女は恍惚の状態に陥ってしまう、口さえきけなくなってしまうのだ。精神分析による治療を受けたアランディ博士の治療室では、博士

に身も心もすっかり委ねてしまいたくなくなってしまふ。それから、あの有名なフロイトの弟子であった、オットー・ラング博士、彼等はアナイスの心の中の小部屋に引き入れられて、アナイスの真実によって切り刻まれ、取捨されるのだ。こうした人々の他にも、当時在パリのシュールレアリスト達、例えば、アントナン・アルトール、アルフレッド・ペルレ等との交友の記録が読まれるし、特に読者の興味をそそるのは、ヘンリ・ミラーとの交友である。

ヘンリ・ミラーのパリ生活の様子は、自伝的な要素が極めて濃厚と、一般には考えられている『北回帰線』に明らかであるのだが、アナイスは、この作品をはじめ、これと共に三部作をなす、『南回帰線』、『暗い春』の成立の過程を見守って来たのである。彼女はヘンリの、あらゆるものを一緒くたに放り込んでしまっている、とでも云えそうな小説の、できかけの原稿を読み、批評し、推敲するようにとさえ忠言する。もちろんヘンリも、彼女の日記を読むのであるし、また彼女の小説の原稿を読んで批評するのである。こうした二人の関係をアナイスは次のように日記の中に書いている。

「私は時々こんなふうにも感じるのだ。私とヘンリとの友情は、単に個人的なものではないのだと。それは、フランスとアメリカとの間のそれを、貴族と平民の間の、文明人と未開人との間のそれを象徴しているのだと。」(日記一)

ここに用いられている、「フランスとアメリカ」、「貴族と平民」、「文明人と未開人」という対比には、これ等の

言葉が本来持っている意味以上のものがあると考えられる。フランス—貴族—文明人という言葉のグループが示すものを云いかえるなら、ラテンの世界即ちカトリシズムの世界とすることができるのであるし、アメリカ—平民—未開人のグループの表わすところを、アングロ・サクソンの世界即ちピューリタニズムを基調とする世界と考えることができるのである。この場合、フランス—アメリカ、貴族—平民、文明人—未開人と云う言葉相互間には、どのような意味合いに於ても優劣はないのであって、あるのはただ、これ等の言葉によって象徴される文明の質のちがいでだけである。それにしてもアナイス・ニンのこれ等の言葉には、なるほどと、うなずけるものがある。

ヘンリ・ミラーについての言及は数多いのであるが、ヘンリの特徴をつかまえて、アナイスは次のようにも述べている。

「ドイツ系のリアリストの上皮をこすり落してみると、下から現われてくるのは、威勢のいいイマジストである。」

(日記一)

日常生活のあらゆるもの、身の雑事を手あたり次第に投げ込んで作り上げられるヘンリ・ミラーの小説の世界が、決してリアリズムの世界ではないことを、アナイス・ニンは早くから知っていた。登場人物はすべて実名で呼ばれているのであるし、街娼たちのはき出す下卑な言葉は、ためらうことなく小説のあちこちにばらまかれているのであるし、アナイスの言葉を引き合いに出すまでもなく、ヘンリは自分の目前にあらわれたものをすべて、選ぶことなく捕

えて、己れの小説の世界に投げこむのだ。そしてでき上るのは、全くのフィクションの世界なのである。リアリズムの仮面をつけた超現実の世界なのである。アナイス・ニンの通る道とは反対の道なのである。オットー・ランク博士の言葉を思い出してみるなら、それは男と女のちがいに基づくものであるのかも知れない。己れをすっかりむき出しにすると見せかけながら、実は男のエゴは、そう易々と尻尾を捉ませないのだから。

さて、アナイス・ニンの日記を読み通して知るのは、彼女の様々な活動の根源にあるのは、「生に対する愛」なのだ、ということである。「生に対する愛」とは決して生に対する執着を意味するのではない。与えられた己れの時間を最大に活用し、楽しみ、最高最善の生を生きようとする、純粹にラテン的な人生観、世界観に基づくものなのである。生きるということは、神から人間に与えられた最もすばらしい贈物であり、最大の権利である。と同時に、義務でもあるのだ。与えられた時間がどのように短かかろうと、長かろうと、その生がどのように小っぼけであろうと、大きなものであると、生を全うするための努力は、時間の切れるまで、力のかぎりなされねばならないのだ。これがラテンの世界のカトリシズムに基づいた「生の倫理」なのである。日記の中にうかがわれるアナイスが、時として如何にエゴイストチックに見えようと、あるいはエクセントリックとさえ見えようと、彼女の行為の一つ一つは与えられた生を全うするための、狂おしいばかりの努力なのである。

当然のことながら、アナイスは母と共に長い時間を暮した。幻想と夢の中に生きたいとねがいがながらも、母の存在は、彼女を現実の中に常に連れもどす引き綱のようなものだった。「私は母や弟達を放り出して自由になりたい」と

嘆いた時もあったのだが、それはただ口の中つぶやきで終って、アナイスはいつもその肩に家族を背負っていたわけである。それは彼女の家族に達する愛と責任感の証明にもなる。しかし、皮肉なことに、彼女がその精神風土の中に受け継いだのは、決して母からの北方的な影響ではない。父の世界の影響を絶つたために移り住んだアメリカであったし、成人してからも訪れる機会があったアメリカである。現在、アナイスはパリを去って、アメリカに居住している。にも拘らず、彼女は真正銘のラテン世界の人なのである。己れの生に対する責任感の強さに於て、生に対するモラルのきびしさに於て、カトリシズムの世界の人なのである。アナイス・ニンにとって生きるということとは、どのような大きな努力にも価するものである。

アナイス・ニンの日記の読者が目くるめく思いをするのは、実に彼女のこの「生のモラル」のきびしさによるのかもしれない。

△参考書目▽

『アナイス・ニンの日記』第一巻

The diary of Anais Nin : vol. one, 1931—1934, ed. by Gunther Stuhlman, New York

『アナイス・ニンの日記』

The diary of Anais Nin : vol two, 1934—1939, ed. by Gunther Stuhlman, New York

『未来の小説』

The Novel of the Future : Anais Nin, New York

『宇宙的な眼』ヘンリ・リナー

アナイス・ニンの日記について